

2. 起こりうる次の災害に備えるべきこと

(1) 5つの波を乗り切る

各地で防災計画の議論が盛んになってきている。そのこと自体は歓迎すべきことだが、どちらかというハードのことに議論が傾きがちだと感じている。自然は私たちが営々と積み上げてきたものを一瞬にして破壊しつくす。私たちは今回の経験から、ソフト面での準備を怠らないということ伝えたい。その備えは、二次三次の被害を防ぐことにつながるからである。

ある行政職員が「私たちには5つの波が来た」と語った。1つ目は津波、2つ目はマスコミ、3つ目は支援物資、4つ目は支援者、5つ目は苦情だという。なるほどと思った。確かに支援物資はありがたかったが、現地の状況や、刻々と変わるニーズに迅速に対応できていなかった。初めは水と毛布ばかりが山と積まれ、被災者が水と毛布はもうたくさんと言ったそう。しかし、ある避難所ではまだ水もコンロもないところにインスタントラーメンの箱が届き、避難所の廊下を埋め尽くしていた様子を私たちも目撃した。たくさん来てもらった支援者もありがたかったが、被災地に入るスタッフの質の確保や研修が不十分である団体も多かった。支援と称して、一方的な計画に被災者を組み込もうとしたり、安全管理が不十分だったり、被災者の自尊感情を損なうようなやりかたになっている団体もあった。そして震災から3年を迎える今、やり場のない被災者の怒りは苦情となって目の前の行政職員、ボランティア、支援者に押し寄せている。津波は避けられないが、ほかの4つの波は、対策を考えれば小さくてすむのではないだろうか。以下に私たちの経験から考え得る対応を記してみた。

1. 津波
 - ・避難はそれぞれに。ふだんから家族でこのことを話し合い、信じ、守る。
 - ・一度避難したら戻らない。
2. マスコミ
 - ・子どもからの取材は親の了解を得るようにさせる
 - ・むやみに写真を撮らせない
 - ・ストーリーを押し付ける取材は断る
3. 支援物資
 - ・ふだんから支援物資受け入れのシミュレーションを行ってスキルアップしておく
 - ・支援物資を送る時のマナーを徹底する
(いきなり送り付けないで事前の連絡をする)
(自分には思い出の品でも他人にとっては中古品であることを考える)
(受け入れ側に配慮した送り方をする)
4. 支援者
 - ・ふだんから支援者受け入れのシミュレーションを行ってスキルアップしておく
 - ・不要の支援を断る勇気をもつ
 - ・支援者を受け入れるガイドラインをつくっておく
 - ・支援者としての基本的な心得を守ってもらう
5. 苦情
 - ・ふだんから苦情処理能力をみがく
 - ・相手の感情にまきこまれない
 - ・自分が疲弊しているときはそのポジションからはずれる

(2) 子どもの参画をすすめる

① 子どもの力と復興計画

1994年国連で採択された「子どもの権利条約」では、子どもの意見表明権など、子どもが積極的に社会と関わる権利があることを定めている。日本は1998年に批准したが、国内ではまだ、「子どもは弱く、判断力もな

い、守るべき存在である」という見方が多い。しかし、今回の震災で見せた子どもたちの姿は、そのようなおとなの価値観を変えるほどのものだった。参画できる「場」と、「仲間」と、「見守り、支援するおとな」に恵まれたとき、子どもは思いがけない力を発揮する。

避難所新聞を作った子どもたち、FMラジオで発信した子どもたち、大人を説き伏せて津波被害のメモリアルプレートを設置した子どもたち、壊滅状態の地域の産業を盛り立てようと新商品を開発した子どもたち、紹介しきれないほどの事例が報告されている。

不登校だったある中学生は、津波被害にあって、これまで足が向かなかった学校に行かざるを得なかった。その学校が避難所だったからである。その避難所でこれまで避けていたクラスメイトと一緒に物資配布などの役目を果たした。避難所が解消された時、彼は何の抵抗もなく学校へ行ったという。彼は「いじめにあって不登校となり、自分に自信が持てないでいた。避難所で、こんな僕でも役に立てるとわかった。ありがとうと言われてうれしかった。」と言っていた。今、高齢者の介護の仕事を目指しているという。津波は彼の家を奪ったが、将来の夢をもたらしした。

他にも、「見ず知らずの人を助けにこんなに多くの人が来てくれて感激した。自分もがんばらなくてはと思った。」「たくさんの自衛隊の人や、お医者さん、看護師さんが私たちのためにがんばってくれているのを見て、命を守るという仕事をしてみたいと思うようになった。」「今までは家の仕事が好きでなかったけれど、お父さんががんばって自分の店を再開し、お客さんが喜んできてくれるのを見て、お父さんの仕事を継ごうと思った。」「自分の住んでいるところは田舎なので、早く都会に行きたいと思っていたが、無くなって初めて町の良さが分かった。町の復興のために働きたい。」等々、津波は悪いことばかりではなかったという声もあちこちで聞いた。

その一方で、避難所から仮設住宅に移ったとたん、子どもの居場所・活躍する場所がなくなってしまったところが多い。住民のための仮設の集会所でさえ、子どもの入室禁止となっていたり、通常は鍵をかけて自由に使

えなかったりと、子どもたちは狭い仮設住宅の部屋に閉じこもっていることが多くなっている。

震災後、それ以前には気づかなかった故郷の良さを再認識し、自分が生まれた地域に対する愛着を強く感じるようになってきている子どもたちが多い。そのような子どもたちは、このまま故郷に住んで復興に役立ちたいと思ったり、一時期進学などで外に出たとしても、故郷に帰りたいと願ったりしている。しかし、家の用地確保が難しい、学校、保育所、遊び場が復旧しないなどの地域は、将来の子育てができないとして、若い世代の人口流出に歯止めがかからない。「場」や「仲間」を失ったところには、新しい芽はなかなか生まれにくい。

子どもたちが自分たちの街の復興に積極的にかかわれる体制や環境を整え、子どもたちの意見を復興計画に反映し、若い担い手として力を出してもらうことが、地域の再生の鍵といえる。被災地でそのような動きがないとは言えないが、まだまだ少数であるし、実際にその意見を反映した事例はまだ聞かない。

私たちは震災でなくしたものを追い求めるだけでなく、希望を生み出すために、子どもと共に歩んでいきたいと思っている。「子どもの参画を実現していなければ、未来がないのは、被災地だけでなく、様々な困難を抱える「日本」の将来にも通じることでもある。

② 子どもたちの自信を取り戻すために

チャイルドラインみやぎは、仮設住宅などに住む子どもたちを対象とした支援事業を行っているが、その時に留意しているのは、子どもが自分の楽しみとして行う事業の他、家族のために何かをすることを大切にしている。例えば、親子対象の事業では親子を別にして、親は子どものためにキーホルダーをつくり、子どもはその間に親のためにサンドウィッチをつくるとか、クリスマスケーキづくりでは、自分たちが食べるケーキの他に、家族に持ち帰るケーキもつくるなどである。こんな時の子どもたちは、本当

に一生懸命で楽しそうだ。親にサンドウィッチやケーキを差し出した時の顔は得意げで、自信に満ちている。また、それをもたらした親は感激し、中には涙を流す親さえいる。震災で打ちのめされた親子にとって、このような小さな積み重ねが、自信の回復につながることを、私たちはこの3年間で目の当たりにしてきた。このようにして自信を回復した子どもたちの行動は、時として大人をも動かすものとなる。

どんなに多くの食料や物資を準備しても、想定外の津波は私たちからすべてを奪っていく。今回の災害は、物理的にどんな備えをしてもほとんど無駄だった。科学の粋を集めたとされる防潮堤は破壊され、備蓄していた食料も流されて無くなった。携帯電話が通じないと不安は増幅した。しかし、災害教育や避難訓練は生き、自分の判断で逃げて助かった子どももいた。地域の高齢者が伝えた「かつてここまで津波がきた」という情報やそれを伝える石碑、「津波でんでんこ（津波が来たらでんでんばらばらに逃げる）」の意味などを思い出して助かった人も多い。正しい情報をもとに、自分で考え行動したことが生死を分けた例である。

しかし、日本の子ども全体を見ると、先に述べたように、自分に自信が持てない子どもが多い。教えられることを覚え、型通りの答えを求めることに慣らされてしまった子どもたちは、自分で考えることが苦手だ。チャイルドラインにかけてくる子どもたちの中にも、「どうしたらいいですか。」と性急に答えを求めようとする子が多い。

チャイルドラインの受け手は、つい何とかしてあげたくなり、気が付くと受け手が一生懸命考えてあげてしまったりする。しかし、その子にアドバイスをして、うまくいかなかった時はどうだろう。「やってみただけだめでした。どうしたらいいですか。」と、また答えを求めることになる。そこで、チャイルドラインでは、そのようなとき、「一緒に考えてみよう」と伝える。時には思いがけないことを思いつく子もいて、子どもの発想の柔軟さに感心させられることもある。

「不登校になってしまった私は、親にとって、もういない子どもなのです。」「親の薦める学校に入れなかった私はだめな人間です。」などという子どもたちに、テストでは答えは一つかもしれないが、実生活では「正解はない」こともあれば、「答えはいくつもある」こともあることを知ってほしい。

前に、大人を気遣って元気になっている子どものことを記したが、それはガラス細工のようにもろく、何らかの力が働くと壊れてしまう。それに反して、きちんと積み上げられた自信は、少しのことでは揺らがない。

③ 子どもの話を聴くこと

これまでに述べた子どもたちの様子から、まだ自分の心を閉ざしている子どもたちが多いことは想像できる。このような子どもたちにしっかり寄り添い、心の回復を助ける必要がある。宮城県では、スクールカウンセラーを全校に配置して対応にあたっているが、その努力をもってしても、前述の校長アンケート結果が示すように、解決には結びついていない。

阪神淡路大震災以来、「心のケア」について多くの人を知るところとなり、「話させることはいいことだ」とばかりに、東日本大震災後には、話したくない人の話まで引きだそうとしたり、怪しげなセラピー等もあったという。そのような支援は論外であるが、子どもたちに関わっていると、こちらが聴くための心の準備ができていないところに不意に話が始まることがある。たとえば避難所や仮設住宅で子どもたちと遊んでいると、子どもが突然、自分が津波にのまれた話をしたり、友達を津波でなくした話をしたりすることがある。同様の経験は、遊び場を運営しているスタッフや、学習支援をしている団体の人から聞くこともある。前に述べた「こどもひろば」のスタッフもそうだったが、驚きを隠して子どもの話をゆっくり聴くことを心がけていると、話を終えると、子どもは何事もなかったかのように遊びに戻っていく。被災した子どもたちは、自分なりに相手を見極め、相手を選んで話しているのだろう。

同様のことがチャイルドラインの現場でも起きている。チャイルドラインの受け手は、既定の研修を終えたボランティアであり、そのプロフィールは様々だ。電話の前に座って、子どもからの電話を待つ。すぐ話してくれる子もあれば、なかなか話し始めないで様子をうかがっている子、中には、こちらの声を聞いてすぐ切ってしまう子もいる。受け手は「子どもによって選ばれる大人」であり、子どもがその人を選んで話したいことを話すのだ。

子どもたちの心の回復に今必要なのは、子どもたちが安心して話すことができる場所と相手である。私たちは、大人の責任において、この二つを準備する必要がある。

④ 子どもの力を育む

今回の震災では、多くの子どもの命が失われた。中には人災と思われるものもある。どんなマニュアルも、その時に役立つかどうかわからない。危険を感じたとき、どう行動するか、自分で考え、自分で決めることが大切だ。判断をするためには、知識と情報が必要である。過去の災害に学び、自分たちの町に即した計画を作り、その時に応じて判断できる能力を培う。今後の防災教育はそのようなものでなければならないだろう。いざという時、自分の知恵と勇気と体力で生き延びていける子どもを育てなければならないことを、今回の震災は教えている。

また、先に記したように、子どもたちが多くの暴力にさらされた。自分で自分の身を守るすべも身につけておきたい。子どもがSOSを発することのできる環境と、受け止める大人の存在をつくる。CAPプログラムなども有効であると思われる。何より子ども自身が自分は大切にされてよい存在なのだと知ることが大切だ。

子どもに権利などを与えるとわがままになるという人がいる。大人が扱いやすい子どもというのは、自分を主張せず、従順な子どもであるが、そのような教育の結果、皆が同じでなければ不安で、出る杭を打つように目立

つ子をいじめてしまう子どもたちや、自己主張ができない子どもたちを生み出しているのではないだろうか。生まれたばかりの子どもはエネルギーの塊のようなものである。あたりなことなどお構いなしで自分を主張している。そんな子どもたちを大人の勝手な理想でどんどん削り取り、心がやせ細った状態にしてはならないだろうか。これを機会に大人たちの「子ども観」を見直してみることも必要だろう。

一方ですでに傷ついてしまった子どもたちへの支援も必要である。震災後、虐待の通告が増加し、いじめや暴力行為が多発したという報告がある。私たちは、いじめなどのハラスメントはストレスの玉突き現象であると感じている。大人から子どもへ、教師から生徒へ、大きい子から小さい子へ、兄から弟へ、やり場のない子どもは小動物へと、それぞれのストレスを発散させている。その解消には、それぞれのストレスに対応した支援が必要であり、家族を丸ごと支援しなければならない。そのためには、子どもが属している集団に関わるおとな、地域の機関などが連携して対応できる体制を整えることも大切だ。

震災後、虐待通告が増えたのは、仮設住宅など狭いコミュニティで発見されやすくなったこと、仮設住宅支援員などの見守り体制の中で発見されるようになったことなども影響していると思われる。このような震災経験から得たメリットは、できるだけその後も継続していければと願っている。

何より必要なのは、幼児期からの人権教育、思春期の性教育などにより、自分を大切にするとともに他人をも大切にすることを学ぶことであろう。それは、子どもの育ちを家庭や学校任せにせず、多様な大人が子どもと本気で関わる機会を多くつくることから実現できるのではないだろうか。